

令和7年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立 緑丘 中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、3年生を対象として、令和7年4月17日（木）に、「教科（国語、数学に関する調査）」、文部科学省が指定した日（4月14日から4月17日の間）に「教科（理科に関する調査）」、「生徒質問調査」を実施いたしました。
 この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。
 学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。
 なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- 教科に関する調査（国語、数学、理科）

教科に関する調査（国語、数学、理科）	
①	身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
②	知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

- 生徒質問調査

生徒質問調査	
○	学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

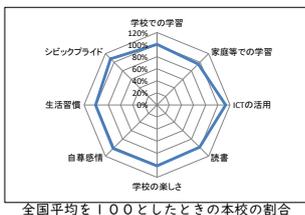
- 全国・本市の学力調査（国語、数学、理科）の結果

本年度の結果	国語		数学		理科
	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	IRTスコア
本市	7.4	53	6.7	45	492
全国	7.6	54	7.2	48	503

- 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	全体として、思考力・判断力・表現力が全国平均を上回る高い水準にある一方で、知識・技能（特に漢字や語彙）に課題がある。記述式問題への強さと、基礎知識の弱さが対照的である。	全国平均正答率との比較	上回っている
	よくできた問題	話の順序を入れ替える意図を問う問題。全国平均を大きく上回っており、論理的な構成力が非常に高い。		
	努力が必要な問題	文脈に即した適切な漢字を選択する問題で、全国平均を10ポイント以上下回っており、大きな課題である。		
数学	全体的な傾向や特徴など	全体として、計算や方程式などの代数的な処理に弱さが見られる一方で、図形の性質やデータの読み取りには強みがあるという、分野による凸凹がはっきりしている。「数と式」が最大の弱点。「図形」「データの活用」に光る部分あり。	全国平均正答率との比較	下回っている
	よくできた問題	度数分布表から相対度数を求める問題。全国平均が低い難問であったが本校生徒は全国の倍以上の正答率。		
	努力が必要な問題	素数を並ぶという基礎問題では正答率が1桁台。果汁の量を文字式で表す問題。「数式」を使って表現する問題。		
理科	全体的な傾向や特徴など	生物の観察や言葉による説明などのイメージしやすい分野は比較的良かったが、目に見えない粒子モデルや計算を伴う物理・化学分野で苦戦している。観察・実験の技能は比較的安定しているが、「見えないもの」の推論・計算が弱点である。	全国平均正答率との比較	下回っている
	よくできた問題	生物の観察と分類に関してスケッチを見て共通する構造や特徴を捉える問題。定型的な実験技能に関する問題。		
	努力が必要な問題	気体の密度(重さ)の大小を推論する問題。柱状図から地下の地層の傾きや広がり立体的にイメージする問題。		

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



質問調査の結果分析	
現状の強みは、教員との強い信頼関係、高い学習意欲と環境、規則正しい起床。「先生はあなたのように話を聞いてくれる」の肯定的回答は96.1%であり、県平均を上回る。また「困りごとや不安を先生に相談できる」割合も81.4%と、県平均を大きく上回っており、安心できる学校環境だと分析できる。「毎日同じくらいの時刻に起きている」生徒は93.1%で、県平均より良好。	
直面した課題は、生活習慣の乱れ、表現力・発信心への自信不足。「毎日同じ時刻に寝ている」生徒は58.9%にとどまり、県平均(80.6%)を大きく下回っている。塾や勉強等による夜型の生活が常態化している可能性がある。「自分の考えがうまく伝わるよう工夫して発表していた」と回答した生徒は45.1%で、県平均(62.1%)を下回っている。特に「当てはまる」と強く答えた生徒は6.9%で県の半数以下であり、プレゼンテーション等のアウトプット活動に苦手意識がある。	

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

- 教科に関する取組

生徒たちのポテンシャル(思考力・表現力)は非常に高い。数字や記号への苦手意識さえ克服できれば、理数の点数は劇的に伸びる可能性があると考えられる。まずは計算ドリルだけでなく「数式の意味を言葉で語る」など活動を重視することで課題解決の第一にはなるかと考えられる。数学だけでなく理科の授業の工夫改善に取り組みたい。

- 家庭生活習慣等に関する取組

生活マネジメント力の育成として、早寝早起きの指導に留まらず、塾や家庭学習を含めたタイムマネジメントの指導、帰宅後のスケジュールの可視化や睡眠が学習効率に与える影響を科学的に伝える保健指導などを実施。アウトプット型学習の強化として、考えを他者に伝える機会を意図的に増やし、ペア・グループワークなど、少人数での発表から、スモールステップで成功体験を積み重ねる。ICT機器の活用スキルを生かし、スライド等を用いた発表活動を教科横断的に取り入れる。